

アジア車いす
交流センター
(WAFCA)



アジア
保健研修所
(AHI)

キャンヘルプ
タイランド



真如苑・名古屋NGOセンター
協働事業

東海地域NGO 活動助成金 報告書

2018年度

セイブ・
イラクチルドレン・
名古屋



わびねす



DIFAR



チェルノブイリと福島原発事故被災者
母親たちの心をつなぐ手紙集
～チェルノブイリの33年、福島の8年～

チェルノブイリ
救援・中部



平和のための
戦争メモリアル
センター
設立準備会





CONTENTS

主催団体からのメッセージ 2

宗教法人 真如苑

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター

助成団体報告書

1. 認定NPO法人 アジア車いす交流センター (WAFCA) 3・4

タイ車いす修理ボランティア事業

助成金額 13万円

2. 公益財団法人 アジア保健研修所 (AHI) 5・6

「社会的インパクト」に基づく評価事業

助成金額 13万円

3. 特定非営利活動法人 キャンヘルプタイランド 7・8

カンボジア トイレ建設プログラム

助成金額 17万円

4. 特定非営利活動法人 セーブ・イラクチルドレン・名古屋 9・10

イラク人医師の愛知県内の病院における医療研修

助成金額 17万円

5. 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 11・12

ウクライナとフクシマの放射能被災者の母親たちの手紙集の作成

助成金額 15万円

6. NPO法人 DIFAR 13・14

効果的な広報・ファンドレイズにつながる広報ツールの開発

助成金額 4万円

7. 認定NPO法人 平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会 15・16

高校生が被爆体験者から証言を聞いて描いた「原爆の絵」と丸木夫妻が描いた

「原爆の図」を展示し、戦争体験の伝承活動を東海地域でも一層喚起する事業

助成金額 4万円

8. 特定非営利活動法人 わびねす 17・18

ハンセン病コロニーの子供たちに届ける日本の絵本読み聴かせプロジェクト

助成金額 17万円

助成金概要 19





2018年度 東海地域NGO活動助成金報告書 主催団体からのメッセージ

(特活) 名古屋NGOセンター

「東海地域NGO活動助成金」は、東海地域を拠点に活動するNGO団体の活動を支援し、その発展に寄与することを目的に、宗教法人真如苑と名古屋NGOセンターの協同事業として2009年度より始めました。ここに第10回目である2018年度の助成事業の報告書をお届けいたします。

当年度は8団体からの応募をいただきました。外部有識者を含めた選考委員会による厳選な審査の結果、8団体すべての事業が助成を受けました。それらのNGOは、それぞれの事業実施において、さらなる成果を上げることができたことと確信いたします。

本助成金は真如苑の寄付により運営され、協同事業主体の名古屋NGOセンターのミッションと行動規範を定めた『ステファニ憲章』の精神に沿った団体事業を対象に助成しています。

真如苑の関係者の皆様のご協力に、改めてこの場でお礼を申し上げます。今後とも東海地域の中小規模NGOの成長にお力添えをいただきながら、新しい価値観や社会の在り方を求めて活動し、連携できることを願っています。

なお現在、2019年度(第11回)の助成事業が公募によって決定しております。

しんによ えん

真如苑について

真如苑は開祖・伊藤真乗(1906～1989)が昭和11(1936)年に開いた仏教教団です。開祖は真言宗醍醐派総本山醍醐寺で得度し、伝統仏教の法流を悉く受け継ぎました。その後、仏典を研鑽の末、仏遺言の教え・大般涅槃經を中心とする真如苑を設立。現在は、伊藤真聰が真如苑の苑主として教団を代表しています。真如苑は、大般涅槃經に説かれる大乘利他の精神を、日々の社会生活に活かす実践を重んじます。真如苑の社会貢献活動は、開祖が願って止まなかった人類の至福と世界平和を現代にあらわしていく営みのひとつです。

タイ車いす修理ボランティア事業

WAFCAはタイ現地カウンターパートであるWAFCATを通じ1999年設立以来、障がい児(者)に車いすの寄贈を行っている。また、WAFCATのボランティア活動の一環として、車いすの修理サービスを受ける事が困難な地方を訪問し、タイ人ボランティアの手で無償で車いすを修理する活動も行ってきた。今回WAFCAのツアー参加者(会員)と、WAFCAT・タイ人ボランティアと協働で修理ボランティア活動を実施した。

事業の背景と目的

〈背景〉

農村部においては、道路の舗装がされておらず車いすが壊れやすい環境であるが、修理を受けられる場所も少なく、壊れたまま使用したり、修理できず放置しているケースも多い。また、社会保障や障がい者雇用制度が不十分であるために経済的な理由で修理を受けられない事も課題となっている。日本ではこの状況はあまり知られておらず、日本で支援者を増やすためにも、現地に赴き活動する事に拠って現状を肌で感じる事が必要。

〈目的〉

修理が困難な地方をタイローカルボランティアが訪問し無料で修理すると共に、交流の機会を設け支援の輪を上げてきた。2018年度は当会企画のツアープログラムの一つとして、日本人ツアー参加者がタイローカルボランティアと共に修理活動と交流を行う場を提供し、障がい児(者)が抱える現状の理解と更なる支援の拡大を図る。

事業の内容

- 6ヶ月前： 現地カウンターパートであるアジア車いす交流センタータイランド(以後WAFCAT)とともにツアー企画、内容決め
- 3ヶ月前： WAFCAT ラチャブリー県特別支援学校等を通じ情報収集と車いすの現物確認
タイ人に対し修理ボランティア募集
WAFCA 日本人に対し現地訪問ツアー募集
- 1ヶ月前： WAFCAT 交換部品と修理工具発注
WAFCA ツアー参加者に事前説明会実施
- 実行→ツアー後振り返り実施

WAFCAの交流事業の一つであるフレンドシップツアーとWAFCAT主催のタイ現地車いす修理キャラバンの連携企画として2018/11/17にタイ ラチャブリー県特殊教育センターにて、日本からのツアー参加者12名、タイ人ボランティア29名(タイ障がい者協会関係者含む)計41名で62台の車いすを無償修理。



心を込めて、楽しく磨いています。

事業実施団体の概要

団体名: 認定NPO法人アジア車いす交流センター(WAFCA)

活動内容:

アジアの障がい児(者)への車いす提供と教育支援を通じ
自立を支援すると共に、バリアフリー社会の実現に寄与する。

住所: 〒448-0834 刈谷市司町1-2 ふれあいプラザゆうきそう内

TEL: 0566-23-5822 FAX: 0566-23-5827

e-mail: ZC8WAFCA@denso.co.jp

URL: <http://www.wafca.jp>



活動の成果と課題

〈成果〉

- ・障がいがある人にとって不可欠な車いすを無料で、安全に使用可能な状態に修理することで、日常生活や外出の手助けとなり、障がい児(者)の生活の向上につながる。
- ・タイおよび日本のボランティア参加者が自ら車いすを修理し、また障がい者と直接触れ合うことで支援の手応えを実感し、主体的かつ継続的に活動する支援者の輪と、タイと日本の交流の輪も広がる。

〈課題〉

WAFCAの活動はタイ、インドネシア、中国が主であり、日本の会員は現地の実態を体験する機会が年に1回の当ツアーしか無い。もっと多くの機会を多くの会員に提供し、実態と交流を体験して障がいに対する理解を深めて頂ける様に資金調達とツアー参加者増への努力が必要。



楽しい車いす修理。



日本人もタイ人も、男性も女性も協力し合って真剣に修理活動。



修理の合間に昼食を摂る参加者。

実施事業での現地もしくは参加者の声

ツアー参加者の声

車いすの修理・清掃は以外と時間が掛り、十分に出来なかった事が心残り。「なぜここまで汚れたまま放置しているのか?」とスタッフに聞いたところ、「家の環境の方がもっと悪い」との事。車いすを寄贈、修理・清掃する以前に衛生環境の整備・教育が必要なのでは?と強く感じた。

事業実施団体のひとこと

この車いすが無いと困る人がいるという気持ちで、みんなで丁寧に磨いたり修理しました。綺麗になった車いすを見た時の清々しい気持ちが支援の輪に繋がると感じました。言葉がうまく通じないながらもタイ人ボランティアや関係者と一緒に活動でき、参加者も達成感を味わっていました。

「社会的インパクト」に基づく評価事業

近年NPO活動の社会的な価値を評価するために、そのインパクトを経済価値に置きなおすSROIという手法が用いられるようになった。それを用いて当法人の主要事業である国際研修の社会的インパクトを評価する。2018年8月～10月に開催した国際研修について、参加者(アジア各国のNGO職員)のほか、ボランティアおよびインターンを対象にアンケートを行い、その回答をもとに社会的インパクトを算出した。

事業の背景と目的

当法人は、「人づくり」による国際協力を行っている。①アジア各国の地域保健・地域開発活動に従事する現地ワーカーの育成 ②日本の人びとと他のアジアの国々の人びとの交流を通して、「草の根」の人々の健康が守られる社会を目指している。主要事業である国際研修も、また啓発を目的とする国内活動も、何らかの知識やスキルの伝達のみを目的とするものでない。そのため「意図はわかるが、成果をどう図るのか」としばしば問われてきた。この課題は、支援者の減少が著しく一方新規に獲得が難しい中、向き合わざる得

ないものであり、これに応えるための一つの試みとして本事業を行うこととした。

直接の受益者である研修参加者のみならず、アジア各国から人を招き日本で実施する事業であることから、期間中彼らと接点を持ったボランティアやインターンの人たちが受けたインパクトも把握し、日本で行う6週間の研修が持ち得る社会的価値の総体をつかもうとした。

事業の内容

NPO活動について詳しく運営への助言経験も豊富で、かつ当該手法を用いた評価活動の経験を持つコンサルタントに依頼し、計7回のセッションを持った。加えて適宜職員で検討し、下記を段階的に進めた。

◆2018年7月～10月

- 1) 社会的インパクトの手法・SROI手法を学ぶ
- 2) 評価対象(ステークホルダー)の選定
- 3) アウトカム仮説の作成と対象の決定

結果、下記を測ることとした。

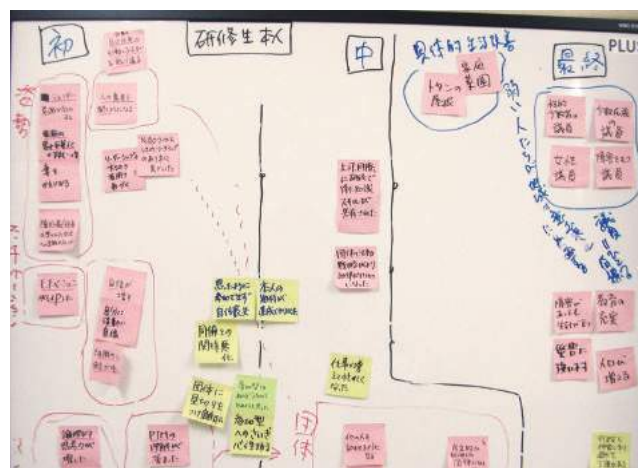
*研修生: 国際研修がねらいとするリーダーシップおよびファシリテーションスキルやファシリテーターとしての資質の向上による、地域での変化(住民の参加度など)及び団体内的変化

*インターン: 今後の進路の明確化、「業務をチームで担う」経験の活用、等。

*ボランティア: 地域貢献への意欲の変化、アジア諸国への関心の変化、等。

◆2018年11月～2018年3月

- 4) 対アウトカムを把握するためのアンケート作成と実施
- 5) アウトカムの収集と数値化の作業
- 6) 組織内での結果の読み取り・分析



研修生の初期～長期のアウトカムを考え中

事業実施団体の概要

団体名:公益財団法人 アジア保健研修所(AHI)

活動内容:

アジア各国で地域保健・開発活動に従事する現地のNGO
ワーカーの育成および日本国内での開発教育や啓発活動

住所:〒470-0111 愛知県日進市米野木町南山987-30

TEL:0561-73-1950 FAX:0561-73-1990

e-mail:info@ahi-japan.jp

URL:http://www.ahi-japan.jp



活動の成果と課題

1) 成果を示す新たな方法を獲得することができた。

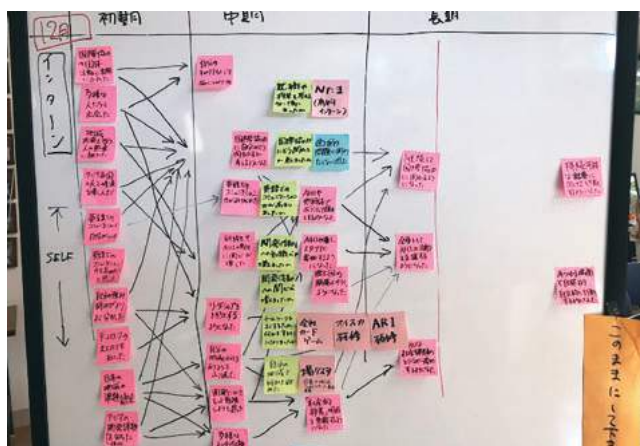
数値化による成果の提示が可能になったことで、これまで接点が持ちにくかった企業・法人等にアプローチする手段を持つことができた。今回の結果をわかりやすい形にまとめ、新規の支援者獲得につなげたい。

2) 事業の改善のための知見を得られた。

一連の作業の中であらためて、事業のデザイン(ロジックモデル)を明確にする必要性が強く感じられ、同時にアンケートの回答から今後「強み」として打ち出せることも確認することができた。事業の改善や強化につなげたい。各研修生が帰国後学んだことを社会的なインパクトにつなげられるよう、研修期間中から自分が育成・動機づけようとする人は誰か、その対象に関して常に意識的になることを促す等である。



帰国後の研修生にスカイプインタビュー



インターンのアウトカムがやっと整理されて



事務局みんなで頭をそろえて考え中

実施事業での現地もしくは参加者の声

アンケートの回答から

- *研修生「研修からの学びはリーダーシップのありかたです。以前は全部自分がやらなければと思っていましたが、今は任せればよいと思うようになりました。任せることでスタッフの意欲が上がったと思います」
- *インターン「事務管理能力、コミュニケーション能力が大きく伸びた。社会、世界に対する視野が転換した」「経験の場であり、成長の場、出会いの場でした」

事業実施団体のひとこと

当初から作業量、複雑さ、貨幣価値換算をする際の恣意性の高さなど、取り組みを開始するには心理的なハードルがありました。が段階を追って進める中で、今までねらいとして掲げていたことが十分明確になっていなかったことなどが浮彫になりました。広く共感を得るためには、対象に応じて伝えるための様々な技術や方策を持つ必要があると思いますが、そのためのチャレンジができたことが一番の収穫でした。

カンボジア トイレ建設プログラム

カンボジア西部バタンバン州サンパオルン郡オコキ小学校にトイレを建設し、学校へ通う子ども達の教育環境を改善する。

事業の背景と目的

現在のカンボジアの地方都市は、内戦終結後の第1次ベビーブームから約30年が経過し、第2次ベビーブームになっている。2000年代前半に、各国のNGOがカンボジアで学校建設の支援などを行ったが、そのころに比べ現在では大幅に児童の数が増加し、深刻な教室不足の状態になり、トタンで造った教室でトイレもないような小さな分校が数多く建設されている。そんな学校の教育環境の改善を目的に現地でトイレ建設支援を行う。



現地へ行き、トイレ建設資金を手渡し

事業の内容

児童数約280名のオコキ小学校には、木造2教室の教室棟1つとコンクリート製2教室の教室棟1つの計4教室あるが、トイレはなく、もちろん電気も水道もきていない。現在カンボジアの地方では2部制の授業を行っており、午前と午後で児童が入れ替わるが、学校にトイレがないため、男子児童は外で用をたすが、女子児童は帰宅まで我慢する場合が多い。腹痛などの場合は学校を休むこともある。

そんな子ども達の教育環境を少しでも良くするため、キャンヘルプタイランドは現地にトイレを建設支援する。



トイレ建設スタート

事業実施団体の概要

団体名: 特定非営利活動法人 キャンヘルプタイランド

活動内容:

タイやその周辺国の貧しい子ども達の教育支援(奨学金支給、教育環境の改善、学生寮支援)

住所: 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-20-11

TEL: 052-566-5131 FAX: 052-566-5131

e-mail: office@canhelp.jp

URL: http://canhelp.jp



活動の成果と課題



村人の手でゆっくりと建設が進みます

学校にトイレが出来たことにより、子どもたちは安心して登校出来るようになり、また、校庭で用をたす男子児童もいなくなるので、教育環境と衛生環境の改善が見込まれる。今回の予算では上水道工事まで出来なかったが、別の寄付により井戸の掘削も出来たので、トイレと井戸の接続でより衛生的なトイレを整備することが出来た。

トイレを建設することで、教育環境の改善は少しできたが、深刻な教室不足の解決にはなっていないので、今後、教室棟の支援なども行いたい。



スカイブルーの清潔なトイレが完成

実施事業での現地もしくは参加者の声

オコキ小学校児童、先生、村人、サンパオルン郡長、教育委員などから感謝の言葉と共に、同地域での継続支援の要請(トイレ、井戸、教室棟、寮など)があった。

事業実施団体のひとこと

タイやカンボジアに興味があったらぜひご連絡下さい。一緒にボランティアしましょう。

イラク人医師の愛知県内における 医療研修支援

戦争・テロに苦しむイラクの医療機関からの依頼を受け、「イラク人医師に愛知県内の医療機関で研修を受けさせて、医療技術をイラクに持ち帰り現地還元してもらう」活動が事業の中心。また、イラク人医療者が愛知県内に滞在している間は、可能な限り講演講義など国際理解や文化交流活動にも参加してもらう。現在(2019.4)までの16年間でのべ53名の医療研修を実施してきた。

事業の背景と目的

イラクは長年にわたり紛争や戦争に巻き込まれてきた。イランイラク戦争、湾岸戦争、国連の経済制裁、イラク戦争、イスラム国(IS)占領などである。

湾岸戦争やイラク戦争では劣化ウラン兵器が大量に使用され、戦後もなお放射能汚染された大地から多くの犠牲者(=がんや先天異常その他)が生まれている。

これらの犠牲者を1人でも多く救うためには、医薬品や設備以外に医療者の技術習得が重要であるが、国情からしてイラ

ク国内での技術習得には限界があるので、「愛知県内でできる医療支援」として当会が2004年以来継続的に取り組んでいるものである。イラク側からの要請も極めて強い。

帰国した医師らは、イラク国内において医療技術を伝える。それだけでなく、日本滞在中に築いた信頼関係を基礎に、様々な直面する治療上の問題について日本の医療機関に助言を求め、日本側が協力するなどしており、帰国後も日本イラク間の継続的医療協力が実現されている。

事業の内容

2018年は、①4月から2ヶ月間、大油田をかかえるイラク中部のキルクークからイマド医師(外科)とムスタファ医師(小児外科)を招聘し、愛知医大病院消化器外科と名大病院小児外科での研修②9月から2ヶ月間、ISに占領され解放されたイラク北部のモスルからファワズ医師(心臓外科)とハリル医師(小児循環器科)を招聘し、中京病院子どもハートセンターでの研修③12月の1ヶ月間、イラク南部のバスラから3名の女性医師(スーハ、アンナ、ファエダ。いずれも麻酔科)を招聘し、愛知医大病院麻酔科での研修、を各々行った。

医師らは、医療研修に励む傍ら、休日を利用して当会主催の講演や大学・高校でのゼミ講義等を担当し、イラク市民の生の姿を知ってもらうとともに平和の大切さについて日本の市民に訴える文化交流活動を行った。(一見女性が差別されているかに見えるイラクの)女性医師らが、「イラクではあり得ないこと。」と日本の医学部試験での女性差別を強く批判する姿が、日本の大学生・高校生に強いインパクトを与えた。

女性医師のひとりアンナは、トルコによるアルメニア(世界最古のキリスト教国)大虐殺を逃れた難民の3世だった。彼女

は「たしかにイラクは問題を抱えている。他方で、アルメニア難民を受け入れ、イスラムモスクとキリスト教会が隣りあって平和的に存在し、難民を差別なく教育して社会の重要な構成要素としてきた。1つの共生のあり方として、国際化する未来を生きる皆さんは考えてほしい。」と訴えたとき、学生たちから大きな拍手が起きた。

これらの活動は、日本の若い世代の国際理解に大きく資していると自負するところである。



名古屋外語大で講演するイラク人医師

事業実施団体の概要

団体名: 特定非営利活動法人セイブ・イラクチルドレン・名古屋

活動内容:

戦争、経済制裁、内戦、テロに苦しむイラクの子どもたちに医療支援を行う。
主として、イラク医師の愛知県内での医療研修支援に取り組む。

住所: 〒461-0011 名古屋市東区白壁1丁目60番地 小野万里子法律事務所内

TEL: 052-957-3555 FAX: 052-957-3559

e-mail: info@iraq-c.gr.jp/

URL: http://www.iraq-c.gr.jp/

※ホームページの更新が十分ではないので、フェイスブックページで日々の活動をご覧ください。



活動の成果と課題

モスルでは子どもの心臓疾患が多発しているが、技術的・設備的に子どもの手術が困難なため、手術の必要場合は、バグダッドか国外に患者を搬送しなければならない。しかし今回の研修で「書籍でしか知らなかった多くの子どもの手術を学べた。子どもの手術を実現するために最低必要な設備もイメージができるようになった。」とのことである。また、小児外科での研修は、子どもの体に負担をかけない腹腔鏡手術(世界的趨勢)が中心であり、未だ開腹手術が主流のイラクの医療を間違いなく変革していくはずである。また、帰国後も日本の研修先医療機関がインターネットで画像診断を行うなど協力して、イラクの医療を助けている。

設備的な問題もあり、ただちにすべてをイラクに導入できるわけではなく、それが課題でもある。しかし、医師らは「まず

は、日本での経験をもとに病院・保健局の医師らで勉強会を行っていく。理解者を増やし、その上で合理的かつ現実的な必要設備について政府への申請を行う。その道筋は見えてきている。」という。道筋を見ることがのできる医師を日本で1人でも多く養成してイラクに帰すことが必要な支援だと考える。

医療研修以外に、国際交流・国際理解が進んでいることも重要である。日本では、イスラム社会はともすれば対立的で女性蔑視的と受けとられやすい。しかし、イラクの大学入試では一切の女性差別がなく医学生半分の女性が事実であることや、宗教や民族の違う人々が共生のために知恵を絞っていることを直接聴いた若い世代は、確実にイスラム社会への見方を変えている。これも活動の重要な成果である。



小児外科の手術に立ち会うスタッフ医師



愛知医大麻酔科で研修する女性医師ら



イラク帰国後に当会の紹介をするファウズ医師

実施事業での現地もしくは参加者の声

当会では、日々の活動状況をフェイスブックで公開している。そのためイラク現地からのコメントも多く寄せられるが、概ね良好な内容である。

また、研修を終えて帰国した医師らの所属病院・所属大学等からも「本人から報告を受けているが、すばらしい支援であり、今後ぜひ続けてほしい。」「次の機会には〇〇分野の研修をさせてほしい。何年でも待つ。」等の声が寄せられている。

事業実施団体のひとこと

7名とも、日本での医療研修、日本での滞在をイラクで生かしています。費用対効果の大きい事業であり、イラクと日本の国際交流としても重大な意味を持つので、今後とも継続していきたいと考えています。

ウクライナとフクシマの 放射能被災者の母親たちの手紙集の作成

かつてチェルノブイリ原発事故で被災した母たちから日本へ送られてきた手紙を読み、また2011年の福島事故被災者への新たな励ましの手紙に、「生きる勇気を得た」というフクシマ(福島県及び東日本を含む)の母たちが幾人もいる。同じ原発事故被災者として双方の母たちが、心をつなぎ励まし合うため、手紙・手記を募集して「手紙集」にまとめ発刊した。今後も原発事故被災を忘れず繰り返さないために、これを活用していく。

事業の背景と目的

チェルノブイリ原発事故の30年目、福島原発事故の5年目を前にした2015年秋から、チェルノブイリ救援・中部では連続講座「チェルノブイリ/フクシマ講座～原発事故被災者と心をつなぐ交流会」を開催して、ウクライナの母たちからの手紙集を被災者・避難者・支援者と読み続けてきた。

そこから見てきたことは、事故から10年目当時のウクライナの母たちが綴っている内容が、福島事故から5年～8年目の母たちの置かれている状況と重なっているということだった。故郷を喪失した悲しみ、避難先での差別や辛い思い、放射能被曝から子ども・家族を守りたいという母たちの想い

と、フクシマの母たちの心情とは共通している。子育て中の多くの母たちは、事故直後の避難や混乱のトラウマ、健康不安を胸に秘め、放射能の食べ物への影響などの不安の中に生きている。

チェルノブイリ事故後の30年を生きてきたウクライナの母たちと手紙で交流することによって、被災体験の苦しみを互いに共有し、不安や問題を乗り越える勇気・生きる力を得ることが必要である。

また同時代に生きる私たち市民が、原発事故を教訓にエネルギー多消費の暮らし方を再考する必要性を訴える。

事業の内容

2012年頃から、福島の被災地で暮らしている人、県外へ避難している人、避難から故郷へ帰還した人の生活や想いなどの話を聞く連続講座「チェルノブイリ/フクシマ講座」を名古屋で開催してきた。さらに2015年からは、これまでウクライナのチェルノブイリ被災者の母たちから日本へ寄せられていた手紙集を読み、家族の健康を案ずる母たちの思いを知り、苦しみを共有する「同講座～原発事故被災者と心をつなぐ交流会」でその体験を学んだ。この連続講座は、名古屋市、福島県南相馬市、さらにウクライナ・ジトーミル市などで通算15回を数えた。

連続講座などの活動の積み重ねから、カウンターパート「チェルノブイリの人質基金」と話し合い、今度は手紙により相互に交流するプロジェクトを開始した。2015年夏、「チェルノブイリの人質基金」は福島の母たちを励まそうと、ウクライナ・ジトーミル州で「母親たちの希望の光」プロジェクトを呼びかけた。日本ではフクシマの被災地や西日本の各地へ避難

している母たちに、ウクライナの母たちへ届ける手紙・手記を募集した。

フクシマの被災者においては、放射能被曝の不安や先の見えない復興、避難先での差別や被災者と社会の分断などから、気持ちを外へ表すことが困難だとわかり、少人数での交流会や支援団体と連携しながら、機会を捉えて個別にも呼びかけていった。そして勇気を持ってペンをとる母たちのそれぞれの思いが綴られた手紙・手記等が14編寄せられた。ウクライナではロシアとの戦争が人々の生活に影響を及ぼしている状況の中で送られてきた手紙5編と最も熱心に日本へ手紙を書いたチェルノブイリ被災者の2018年の来日講演録とキエフ市の被災者団体「ゼムリヤキ」からの寄稿文も掲載した。

日本・ウクライナ双方での交流を図るために、それぞれの手紙は日本語/ウクライナ語(ロシア語)の対訳として一冊にまとめ、発行した(800部)。

事業実施団体の概要

団体名: 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

活動内容:

チェルノブイリとフクシマ(福島県・東北・関東地区を含む)の原発事故被災者の母親たちの被災体験・避難生活等を綴った手紙・手記により、ウクライナと日本の母親・市民への相互理解と交流、事故の風化の防止、後世への教訓を目的とした手紙集を作成、発刊。

住所: 〒460-0012 名古屋市中区千代田5-11-33 ST・PLAZA・TSURUMAI 5-B

TEL/FAX: 052-228-6813

e-mail: chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

URL: <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



活動の成果と課題

福島原発事故の被災者は、放射能に関する不安や差別、社会の「分断」などから、気持ちを外へ表せず、手紙は順調に書き進められなかった。そんな中で、呼びかけに応え勇気を持ってペンを執った母たちの思いのこもった手紙・手記等が14編寄せられた。参加した母たちは主に愛知県への避難者で、福島在住は2名だった。被災者への精神的な支援においては、現地へ赴き時間をかけて話を聞く必要があるが、交通費等資金的な課題から福島での呼びかけは3回に留まった。

またウクライナ訪問時に「チェルノブイリ/フクシマ講座inジトーミル」を開催し、チェルノブイリの被災者にフクシマの被災者の状況を紹介した。新たな5編と来日講演録を掲載できたが、もう少し多くの参加を期待したが、戦争の影響に加え、事故から30年の経過で当時の子育て世代から次の世代へと変わり、事故の風化ともいえる。フクシマの未来への教訓である。

手紙の翻訳には「日本ウクライナ文化協会」のウクライナ人の母たちの協力が得られ、冊子の表紙絵はボランティアのオリジナル作品、本文中には「ダキシメルオモイ」プロジェクトから被災者の母子像が提供されるなど、多方面の協力が得られた。

実施事業での現地もしくは参加者の声

参加者からは、「手紙を書くことで当時を思い起こし、気持ちの整理ができた」「このような機会を得られてよかった」「自分でもだんだんと当時のことを忘れてしまっているので、良い機会だった」「こういう冊子があれば、人に話し安く分かってもらいやすいと思う」などの声が聞かれた。支援者からは「被災者には精神的支援が大事だ」と感想、意見が述べられている。

事業実施団体のひとこと

ウクライナと比べてフクシマの原発事故の被災者は、自分の思いを外に出すことをためらう人が多く、声を上げにくい環境にあり、それは地域性の問題とも聞く。また被災者の生き方も反映していて、「自分は声をあげていく」と決意し前を向いて生きることを決めた人と、まだ迷いや悩みのある人とで違っている。被災者を支える身近の支援団体の存在や社会への信頼感にも依る。何より、原発・核の無い社会にしていけることが重要と考える。



南相馬市でウクライナの母たちの手紙を紹介



ウクライナでチェルノブイリ被災者との交流



ウクライナで福島
の被災者の状況を
紹介



チェルノブイリの母から
日本の母への手紙集

効果的な広報・ファンドレイズにつながる 広報ツールの開発

イベントの参加者に配布するためや、企業訪問の際に団体を紹介するための広報ツールを新たに作成しました。具体的には、①既存のパンフレットの情報を見直し、最新の情報に更新しました。②DIFARの名刺を作成しました。③企業訪問の際に活用するための、団体の活動が詳しく載ったパンフレットを作成しました。④HPの情報を最新のものに更新するための準備を行いました。

事業の背景と目的

DIFARのポリビアでの活動のニーズは広がっており、自己資金を確保し団体の持続可能な運営を実現することが今後の課題であり、企業訪問を積極的に行っていくという活動方針に合わせて、現在ある団体のパンフレットやHPの内容を見直し、より団体のビジョンや活動内容が伝わりやすい広報資料の開発に取り組み、団体の基盤強化につなげたいという思いがありました。

また、広報と国際交流を目的としたイベント「森の音楽祭」を毎年開催していますが、参加者に実施したアンケートの中では、「DIFARの活動への理解が進んだ」と回答する方は全体の1割程度でした。DIFARへの関心をもってもらうため、活動紹介のパンフレットを配布できるよう作成し、活動への理解を促進する必要性を感じていました。

さらに、既存のパンフレット・HPともに内容の更新が必要な部分ができたので、広報ツールの見直しをする必要性がありました。そのため、既存のパンフレットの修正と新たな団体紹介用リーフレットを作成する目的で本事業の申請をいたしました。



ポリビアのプロジェクト実施地の様子

事業の内容

①既存のパンフレットの情報を見直し、最新の情報に更新しました。

すでに作成していたA4三つ折りサイズのパンフレットの内容を最新のものに更新し、印刷しなおしました。

②DIFARの名刺を作成しました。

既存のパンフレットをデザインしていただいたデザイナーにお願いして、名刺の背景を作成してもらいました。団体内のすべての関係者が使用できるように、名前と個人の連絡先は手書きにできるようにデザインし印刷しました。

③企業訪問の際に活用するための、団体の活動が詳しく載ったパンフレットを作成しました。

団体の年表や活動内容、ビジョンやミッションを明記した団体の活動紹介用パンフレットを作成しました。

④HPの情報を最新のものに更新するための準備を行いました。

HPを維持していくうえでの課題をあげ、HPの管理システムの変更をどの時期に誰と行うかについて協議をしました。実際のHPの情報更新・システム更新については、今回の予算で作り直すことは難しかったため、来年度予算を組んで作り直すことに決められました。

事業実施団体の概要

団体名：NPO法人DIFAR

活動内容：

南米ボリビアで地域の人々のニーズを大切に、農村の人々の生活を改善するためのプロジェクトを実施しています。主な事業はエコサントイレの建設とごみリサイクルシステム導入プロジェクトです。

住所：〒515-3421 三重県津市美杉町八知1383番地

e-mail: info@difar.jp

URL: http://difar.jp



活動の成果と課題

広報ツールが整うことで、より多くの方がDIFARの活動に注目くださり、活動に賛同してくださることによって、会員数や寄付者の増加が見込まれます。

また広報ツールを整えることで、より積極的な広報活動が実現し、企業へのアピールなど、新たな賛同者を増やす活動にもつながります。



パンフレットを配布した森の音楽祭の様子



本事業で印刷したパンフレットと名刺



本事業で制作した団体紹介のパンフレット

実施事業での現地もしくは参加者の声

団体の活動が見やすくなった。写真もたくさん入っていて、活動の様子が伝わる。創始者の思いがパンフレットを見るだけでは伝わらないので、別紙に団体代表の挨拶を印刷して折込むといいのではないかな。

事業実施団体のひとこと

この度は当団体の広報ツール作成のために助成をいただき、ありがとうございました。イベント出展時や会員様への送付、企業訪問時に今回作成した広報ツールを活用し、活動のアピールを行っています。今後も団体の広報活動に役立てていきます。

高校生が被爆体験者から証言を聞いて描いた「原爆の絵」と 丸木夫妻が描いた「原爆の図」を展示し、 戦争体験の伝承活動を東海地域でも一層喚起する事業

2018.7.7 戦争体験「語り手」が東邦高校に出向き 熱田空襲の体験談を美術科生に語る
7.24～9.2 「原爆の絵」「原爆の図」展示会開催 於、戦争と平和の資料館“ピースあいち”
7.29 展示のギャラリートークに東邦高校生を招待
2019.3.5～5.5 熱田空襲展に東邦高校生の作品(20点)を展示

事業の背景と目的

北東アジアで核兵器の使用が心配される中、他方では核兵器廃絶国際キャンペーンが、ノーベル賞平和賞を受賞した。いま、市民の中に核廃絶の機運が高まりつつある。これを機会に東海地域でも、特に若者に原爆被害、空襲被害の記憶を呼び起こし、さらには、戦争と平和について知り、考える機会を提供することを目的とする。

しかし、核による戦争抑止力強化・軍備拡張による「積極的平和主義」の論調も強く、世論の動向が危ぶまれている。だが、東海地域では高校生の平和学習が進んできている。「平和への寄与」を目的とする当法人は、平和学習を支援する。

事業の内容

ピースあいち近隣の東邦高校は、1944年12月、学徒動員先の三菱重工業で空襲を受け、教師2名、生徒18名が犠牲になり、毎年慰霊祭を行い、さらに日常的に戦争と向き合うことを意図している。その一環として、空襲体験者から体験談を聞き、造形するプランが出てきて、体験談の語り手紹介をピースあいちに依頼してきた。ピースあいちの語り手の中野見夫氏が1945年6月の熱田空襲の体験を語り、生徒は制作に取り組んだ。一方で、ピースあいちは、広島市立基町高校生が描いた「原爆の絵」と丸木夫妻の「原爆の図—幽霊—」を展示した。それらの参観のほか、両高校生の交流の場を設けた。東邦高校生は造形物を文化祭で一般公開し、ピースあいちでの「熱田空襲」展(2019年3月～5月)でも展示した。

勤労動員先での生徒の犠牲は、旧制中学校から歴史を重ねている高校にはある。この事業は、それらの歴史発掘への刺激となり、広く一般的な価値をもつものである。

さらに東邦高校生徒会は、沖縄、広島、長崎に「慰霊の日」があるが、名古屋市では制定されていないことに着目し、広く他校の賛同を得ながら、名古屋市議会に「名古屋空襲慰霊の日

制定」を請願した。18歳公民権行使を目前にして、ビッグフェスティバルで改憲の「模擬国民投票」を実施し、「改憲、無関係じゃない」と若者仲間に訴えた。

一連の事業、活動は地域の新聞・TVで大きく報じられ、広く市民の知るところとなった。



「原爆の図」ギャラリートーク みんな真剣

事業実施団体の概要

団体名：
特定非営利活動法人 平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会

活動内容：

- ①人権の擁護又は平和の推進活動 ②社会教育の推進を図る活動
- ③国際協力の活動

住所：〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台2-820

TEL&FAX: 052-602-4222

e-mail: peace-nw@sirius.ocn.ne.jp (事務局 庭山)

URL: http://www.peace-aichi.com



活動の成果と課題

- ・高校生が描いた「原爆の絵」と丸木夫妻の「原爆の図」展の参観者は、果敢な広報にもかかわらず 1481名 (大人1064名、小人 417名)と計画(2000名)を下回った。
- ・高校生への戦争体験伝承という点では、東邦高校・同生徒会との協働で、想像以上の展開を見た。名古屋空襲慰霊の日制定請願の賛同校(生徒会)は36、他の賛同団体を含めると、その数は50に及んでいる。この芽生えを大切にしたい。



「熱田空襲展」東邦高校生の作品展示コーナー

実施事業での現地もしくは参加者の声

- ・「高校生が描くヒロシマと丸木位里・俊の原爆の図」と同じ光景を目の当たりにした方々がいらっしゃるのを思うと恐ろしく、このような光景は二度と生みだしてはいけないと思います。(14歳女)
- ・体験者から聞き取り、絵画として表現することで、生徒自身が想像を遥かに超える痛みを覚えつつも、そこから逃げずに立ち向かったその思いが強く伝わる展示でした。ピースあいちが存在する事の意味を2時間余りの鑑賞で痛感しました。(62歳男)

事業実施団体のひとこと

これからも地域での非暴力社会形成のため、企画展、イベントを開催していきます。今後ともご支援、ご指導をお願いします。



2018.11.4 毎日新聞記事



2018.11.14 中日新聞記事

ハンセン病コロニーの子供たちに届ける 日本の絵本読み聴かせプロジェクト

教育が行き届いていないインドハンセン病コロニーの子供たちへ、絵本と本棚を寄贈するとともに、絵本の読み聴かせを行いました。本事業を通じて、文字に親しむ環境を整え、読み書きに対する学習意欲を高めることを目指します。また海外の文化、考え方に触れる機会をすることで子供達の想像力の向上にもつながります。

事業の背景と目的

〈背景〉

ハンセン病コロニーの子供たちは、差別による貧困や親世代の教育についての意識が低いせいもあり、まともな教育環境を得られずにいます。親世代の大半は読み書きが出来ません。そのため、子供たちが持っている本といえば教科書があるのみで、日常的に文字を読む環境がないため、言葉が話せても読み書きが苦手もしくは出来ない子供が多いのが現状です。読み書きが苦手であることが学習の妨げとなり、学校の勉強についていくことが出来ずにドロップアウトしてしまうことも多いです。そのため、子供たちが文字に楽しく触れ合う機会を

設けることで、学習意欲を高められるような状況を作る必要があります。

〈目的〉

日本の絵本の中でも子供達が興味関心を引くような題材を選び、絵本を通じて読み書きに親しんでもらうことを第一目的としています。楽しみながら文字を読む機会を得ることによって、読み書きの苦手意識を取り除き、学習意欲を高めることにつながっていきます。また物語を読むことで想像力を高めることも出来ます。

事業の内容

【実施時期】2018年3月、5月、8月、2019年3月の計4回

【実施地】

- ①インド西ベンガル州ビシュナプールハンセン病コロニー
- ②インド西ベンガル州マニプールハンセン病コロニー
- ③インド西ベンガル州チャクドラハンセン病コロニー

【対象者】上記コロニーに住んでいる子供達 計約80人

【実施内容】日本の絵本(ベンガル語に翻訳済のもの)の読み聞かせ及び贈呈

【具体的な活動内容】

- ①絵本の準備
認定NPO法人ESA様及び出版社様、作者様のご協力の下、合計23種類115冊の絵本を用意することが出来ました。(絵本の例:おおきなかぶ、おおかみとしちひきのこやぎ、など)
- ②翻訳及び翻訳シールの貼り付け
日本語の絵本のため、認定NPO法人ESA様及び有志のボランティアの方のご協力の下、ベンガル語に翻訳し、翻訳した内容をシールで絵本に貼り付けました。

③読み聞かせの練習

当団体学生メンバーがベンガル語での読み聞かせの練習を日本及び現地にて行いました。殆どのメンバーがベンガル文字を読むことは出来ませんが、カタカナでルビを振って練習しました。

④コロニーの子供達に読み聞かせ

現地にてコロニーの子供達へ読み聞かせを行ないました。時間の都合上、持参した絵本のうち1〜2種類ほどしか読み聞かせは行うことが出来ませんでしたが、子供達は皆食い入るように絵本を見ていました。

⑤気に入った絵本のページを模写

読み聞かせ後、気に入った絵本をそれぞれ選び、クレヨンを使ってお絵描き大会を行ないました。皆それぞれ好きな絵があり、とても素敵な絵を描けていました。

⑥コロニーの子供達へ絵本や本棚の贈呈

子供の数が少ないコロニーでは、1人1人に絵本を贈呈しましたが、子供の人数が多いコロニーでは絵本と共に本棚を贈呈し、共有の図書スペースを作りました。

事業実施団体の概要

団体名: 特定非営利活動法人わびねす

活動内容:

ワークキャンプ事業、就労支援事業、教育事業を通じて、インドハンセン病コロニーの自立支援活動を行っています。「ハンセン病による"差別"と"貧困"を過去に、"尊厳"と"希望"を今と未来に」

住所: 〒484-0061 愛知県犬山市前原北荒神洞35-2

TEL: 080-3529-0453

e-mail: info@wappiness.org

URL: http://wappiness.org



活動の成果と課題

【活動の成果】

読み聞かせ後、子供達は人生初めての絵本を夢中になって読んでおり、わからない言葉があると上級生に質問するなど、読み書きに関する学習意欲が高まるきっかけを作ることが出来ました。今回使用した絵本は日本の絵本が中心であり、道徳的な物語であることが多かったためか、彼らのお兄さんお姉さん世代である大学生の子達からも「面白いし、とても良い内容だ」という言葉を聞くことが出来ました。物珍しさだけでなく、内容も彼らに理解してもらえていたことは良かったです。また、後日コロニーを訪れた際も、絵本を大切にしまっている様子を見せてくれるなどとても喜んでもらっている様子が伝わってきました。

【課題】

当プロジェクトで子供達がいくら勉強に意欲を持ったとしても、親の理解無くしては将来に繋がりません。本事業のような子供達の学習意欲を高めるためのものと並行して、親世代の教育に関する認識を変化させるプロジェクトを実施する必要があると強く感じています。



学生メンバーが読み聞かせを行っている様子



自分が描いた絵を見せてくれている子



子供達が絵本を模写している様子



絵本をもらってうれしそうな表情の子

実施事業での現地もしくは参加者の声

ごみ問題をテーマにした「ごみをばいばい」という絵本も読み聞かせ後に、「捨てられたごみはどこへ行くの」というこちらからの問いかけに対し、子供たちは「どこに行くんだろう」と、ごみについて真剣に考えてくれました。また、「ウォーリーを捜せ」という絵本を読んでいた子供たちは口々に「見つけた!」「いやそれは違うよ」など皆絵本が見えなくなるくらい集まって一生懸命探していました。

事業実施団体のひとこと

今回対象となったコロニーの子供達は勉強どころか読み書きがおぼつかない子が大半です。そのため学校では勉強についていけず、卒業後は本を読む機会を持つことはありません。そのため今回の絵本プロジェクトを通じて、本を読む楽しさをお子達に気づいてもらえる良い機会を作ることが出来、子供達の将来の可能性を少しでも広げられたと感じています。ご支援いただきありがとうございました。

東海地域NGO活動助成金 (名古屋NGOセンター・真如苑共催)公募要項

この助成金は、東海地域を拠点に活動するNGO団体の活動を支援し、その発展に寄与することを目的に、特定非営利活動法人名古屋NGOセンターと宗教法人真如苑の協働事業として2009年1月に設立されたものです。助成資金は真如苑からの寄付によるもので、名古屋NGOセンターはこの寄付が有効に生かされるよう、本要項にそって助成団体を公募します。

1. 対象団体

愛知、岐阜、三重、静岡県内に活動拠点があるNGO団体で、申請時において設立後3年以上経過し、継続的な活動実績がある団体。法人格の有無は問いませんが、民主的で開かれた組織運営がなされていること。応募は1団体につき1件のみとします。なお、前年度までに採択された団体または事業も応募することができますが、直近の3年間で複数回本助成金を受けている場合には優先順位が低くなります。

2. 助成対象期間

- (1) 2018年4月1日から2019年3月31日の間に実施する事業を対象とします。
- (2) すでに実施中で2018年度も継続する事業や、2019年度以降も継続する事業も応募できます。この場合、上記(1)の期間中に実施される部分が助成の対象となります。

*事業の実施場所は国内、国外を問いません。2019年5月までに事業実施報告書を提出できることが条件です。

3. 採択予定件数と助成金額

5〜6件程度。1件あたり20万円以内、かつ対象事業経費の80%以内。助成総額100万円を上限に配分します。

4. 助成対象事業

名古屋NGOセンターのミッションと行動規範を定めた「ステファニ憲章*」の精神に合致していれば、特に分野は定めません。教育、保健、医療、福祉などの分野、職業訓練、技術移転、人づくりを通じた自立支援、災害復興、環境保全、多文化共生、その他の人道的活動や啓発活動など、国の内外を問わず様々な活動が対象となります。組織基盤の強化、専門スタッフの育成、広報ツールや一般向け教材の開発、活動の輪を広げることに結びつくようなチャリティ・イベントやファンド・レイジング事業も対象とします。

*ステファニ憲章については、

名古屋NGOセンターのホームページ「ミッションと道のり」
<http://nangoc.org/about/mission/>
からご覧いただけます。

5. 提出書類 (郵送または直接持参してください)

- (1) 助成申請書、事業計画書、収支予算書 各1部
(様式は名古屋NGOセンターのホームページ
<http://www.nangoc.org>からダウンロードできます)
- (2) 団体の定款(会則)、役員名簿 各5部
- (3) 前年度の事業報告書および決算報告書(またはそれらに準じた資料) 各5部
- (4) 会報またはパンフレットなど活動内容がわかる資料3点×5部
(重要な箇所それぞれ数ページ程度をA4サイズでコピーしても結構です。この場合も資料3点(コピー)×5部を提出してください)

※(4)の資料がない場合は、A4用紙1枚程度で「団体の概要」をお書きください。

6. 応募受付期間

2018年1月5日(金)〜1月23日(火) 必着

7. 応募書類提出先、問い合わせ先

〒460-0004 愛知県名古屋市中区新栄町2丁目3番地
YWCAビル7階

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター事務局
(担当 村山、堀江)

TEL&FAX:052-228-8109 e-mail: info@nangoc.org
(火〜土曜日の13時から17時まで、祝日を除く)

※応募書類受領後、当該団体または担当者様に受領確認のメールを送ります。応募締切日(1月23日)より5日を過ぎても受領確認のメールが届かない場合は、上記事務局までお問合せ下さい。

8. 選考方法および結果通知

- (1) 選考は、外部有識者等で構成される選考委員会により厳正に行われます。
- (2) 第一次選考: 申請書類に基づいて行い、2018年2月16日(金)までに結果を通知いたします。
- (3) 最終選考: 一次選考通過団体を対象に、2018年3月3日(土)午後、会場未定(1団体5分間程度のプレゼンの後、選考委員による7、8分程度の質疑)。プレゼン(質疑対応含む)は基本的に1団体2名以内でお願いします。
- (4) 最終結果は2018年3月9日(金)までに通知します。
- (5) 必要な場合、追加資料のご提出などをお願いする場合があります。
- (6) 選考過程の詳細や採否理由に関するお問い合わせにはお答えできません。

9. その他

- (1) 最終選考(公開プレゼン)に進んだ団体には、2名以内かつ合計1万2千円以内で交通費を補助します。ただし、団体事務所の住所を基準に、公共交通機関で往復2,000円以上要する場合に限ります。
- (2) 助成金の交付は2018年3月下旬までに行います。
- (3) 虚偽の記載や資金の不適切な使用などが判明した場合は、助成金の全額または一部を返還していただく場合があります。
- (4) 本助成を受けて実施する事業について、報告や広報媒体への掲載を行う際には「東海地域NGO活動助成金(名古屋NGOセンター・真如苑共催)」を受けた旨を明記してください。報道で取り上げられた場合は記事コピーやビデオ等を名古屋NGOセンターに提出してください。

以上



2018年度 東海地域NGO活動助成金 報告書

発 行 者 :

宗教法人 真如苑

URL: <http://www.shinnyo-en.or.jp>

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター

〒460-0004

名古屋市中区新栄町2-3 YWCAビル7F

TEL&FAX: 052-228-8109

E-Mail: info@nangoc.org

URL: <http://www.nangoc.org>

レイアウト: 久 由紀枝

(特活)名古屋NGOセンターの紹介

名古屋NGOセンターは、貧困・紛争・環境破壊などの地球規模の課題を解決するために、市民が主体となり取り組む活動を支援しています。支援を通して、人権、平和、環境が守られる社会の創造をめざしています。



45の加盟団体が世界中で活躍しています。

- ・認定NPO法人 アイキャン
- ・公益財団法人 アジア保健研修所(AHI)
- ・公益社団法人アムネスティ・インターナショナル
日本“わや”グループ
- ・(特活)アーユス仏教国際協力ネットワーク・東海
- ・(特活)イカオ・アコ
- ・ACF JAPAN アジアこども基金
- ・公益財団法人 オイスカ中部日本研修センター
- ・オヴァ・ママの会
- ・オリブジャパン国際開発協力協会
- ・GAIA(がいあ)の会
(主活動=名古屋をフェアトレード・タウンにしよう)
- ・(特活)キャンヘルプタイランド
- ・国際相互理解を考える会
- ・(特活)沙漠緑化ナゴヤ
- ・NGO・世界の子どもたちを貧困から守る会
- ・(特活)タランガ・フрендシップ・グループ
- ・(特活)地域国際活動研究センターCDIC
- ・(特活)チェルノブイリ救援・中部
- ・なごや自由学校
- ・公益財団法人 名古屋YWCA
- ・南遊の会
- ・ニカラグアの会
- ・(特活)NIED・国際理解教育センター
- ・一般財団法人 日本国際飢餓対策機構(JIFH)
- ・日本バングラデシュ友好協力会(JBCS)
- ・ハート・フォー・ザ・ワールド・ジャパン
- ・フィリピン人移住者センター(FMC)
- ・不戦へのネットワーク
- ・認定NPO法人 平和のための戦争メモリアル
センター設立準備会 ピースあいち
- ・ベシャワール会名古屋
- ・認定NPO法人 ホープ・インターナショナル開発機構
- ・認定NPO法人 レスキューストックヤード
- ・認定NPO法人 インド福祉村協会
- ・Cocoagora ココアゴラ
- ・(特活)ボラみみより情報局
- ・(特活)泉京・垂井
- ・バングラデシュ保育園の会(B.N.S.A)
- ・(特活)DIFAR
- ・(特活)多文化共生リソースセンター東海
- ・ピンブラザーホッド トーカイジャパン
- ・(特活)まちづくりスポット
- ・(特活)ル・スリール・ジャポン
- ・マゴソスクールを支える会
- ・認定NPO法人 アジア車いす交流センター(WAFCA)
- ・認定NPO法人 ムラのミライ
- ・外国人ヘルプライン東海

※(特活)は、特定非営利活動法人の略です。